

クーラーの効いた待合室の椅子に座って、私は島に向かう連絡船の乗船を待っていました。連絡船が係留されている棧橋から二つ隔てた棧橋に大型フェリーが着岸しました。そこから乗用車やトラックが次々に下船し始めました。芸術家を招いて滞在してもらい、創作活動を支援する島は、彼らの作品を鑑賞するために訪れる観光客で賑わっているようでした。私の目指す比木島このきじまに向かう連絡船は、一階客室と二階に一部屋根付きの座席の後ろに展望デッキがある小型船でした。待合室にアナウンスが流れ連絡船への乗船が始まりました。ブリッジを渡り、揺れを感じながら二階に向かいました。階段上り口脇の壁に定員七十人と記された鉄板が留められていました。

椅子に座り遠く視線を向けると比木島の島影が水平線に浮かんでいました。あの日、比木島からこちら本島側の街並を見た幼い自分を思いだしました。島を出て新しい生活を始める言いようのない緊張感が、幼い私にも伝わっていました。船が動き出し、エンジンが吐く黒い煙がその思いを払うように横に流れていきました。船に私を知る人がいたら厄介だと思いました。が、声をかけてくる人も、私に気を留める視線も、感じることはありませんでした。小学校一年生の時の同級生と出会ったとしても、二十年近く経た私の顔に気づくのは難しかったです。しょうし、私も同級生を見分けることはできないと思いました。比木島での生活は、穏やかで幸福であったはずなのに記憶は曖昧で、揺らせばふわふわと舞う薄い^お澱のようになり私の中に貯まっています。それは、時間が経ちすぎているからなのか、島を離れた後の生活が色濃く記憶を上

書きしてしまつたためなのか分かりませんでした。

風は、湿り気を含んでいましたが心地よく感じました。船尾から白い波を伸ばし連絡船は青い海を進みました。島影が近づくと、れ、水平線に消えてしまひそうだった島が大きく見えてきました。人口三百人の島は当時の私を占める世界の全てだったのだろうと、今の私にも迫ってきました。東京で暮らし、港の左右に広がる景色を思い出すこともないのに私の中の何か勝手に反応して景色を照合していくのでした。

船はエンジンの音を落とす、こうして実際に目の前に現れれば、見覚えのある小さな港にゆっくりと着岸しました。

++++

連絡船から降りた二十人ほどの人たちは、車の迎えが来たり、駐車場に停めていた車を

運転したり、そうでない何人かは歩いて港を後にしました。人影は消えてしまいました。連絡船のエンジン音はいつのまにか止んでいました。

静寂を割くように鳥の鳴き声がしました。

小さな入り江の港に響いて、こだましました。た。見上げると鳶とびが青い空に円を描いて、舞っていました。正面の丘に海風が当たり、上昇気流を生んでいるのでしよう。鳶はあの時も空を舞って、私たちを見下ろしていたのでしようか。

棧橋から待合所に歩きました。コンクリートの外壁の建物は窓も入り口の扉も開放されていました。中に入り、四つあるベンチの一つに座り、正面の海を眺めて深呼吸しました。天井の隅にかかった蜘蛛の巣が風に揺れていました。

二十年前に巻き戻した風景を頭で探ります。今、時刻はあの時と同じ正午を一時間ほ

ど過ぎた頃でしたが、季節はあの時より一か
月遅い、秋の入り口でした。おぼろげだった
記憶が光や匂いと共に蘇ってきて胸が苦しく
なりました。
完成したばかりの待合所に、湿り気を含ん
でざらついた空気とコンクリートの匂いが充
満していました。母は待合所から出て遠く対
岸に霞んで見える街並を見ていました。陽射
しが強く、白いブラウスが眩しかったのを覚
えています。
島を離れたのは、お盆の墓参りを終えてし
ばらく経っていましたから、八月の半ばを過
ぎた頃だったと思います。小学校一年生の同
級生が見送りに来てくれました。何人集まっ
てくれたのかは思いだせませんが、棧橋に一
列に並んで手を振ってくれた光景が思い出さ
れます。
ふと、あの頃、毎日遊んだ海岸を見たくな
りました。ベンチから腰を上げ、待合所を出
て歩き出しました。海を背にして進むと道が

三つに分かれています。昨日、スマホで調べた島の地図では、確か、正面の丘に向かう道は島を縦断する道路で、左右に広がる道は周回道路でした。左の道に進みました。今私が歩いている場所は、高台にある家々の庭先から見えるはずでしたが、それらの庭に私を見ている人影はありませんでした。ひび割れたアスファルトの道を進みました。中央の白線は消えかかっていた。左右の車線がどうか分かる程度でした。秋とはいえず、陽射しは強く、アスファルトの照り返しで頬を熱く感じました。家並みからテレビの音が漏れていました。この辺りに友達の家があります。遊びに来たような記憶があります。苔の付いたブロック塀や門柱を見て、記憶のどこかにその佇まいが仕舞われていた気がしました。少しばかり海岸沿いの道を歩くと、松林があり、その先に砂浜が広がっていました。林の木は同じ角度に少し島側に傾いていました。アスファルトの道路から小路に逸れ、砂

浜に入りました。立ち止まり、辺りを見回しました。

+++++

松林を背に広がる砂浜と海を見て、ここは覚えていゝ、そう確信できる景色でした。ずっと焦がれていた場所ではないのに、先ほど待合所でたまたま思い出しただけでしたのに、胸が締め付けられる感じがしました。それは苦しいというより痛いという感情に似ていました。私は何か大切なものをここに残してきたのでしうか。再び歩き出しました。自然と足どりが速くなり、なりました。ここで遊んだ時の情景が思い浮かんできました。砂浜ではしゃぐ二人の女の子の声が聞こえます。一人は私です。景色はあの時と何も変わってないように思いました。人のいない静かな海岸、私たちの歓声があがり波の音がそれを消しました。波打ち際

から随分と離れた松林に近いところに、ひと抱えもある流木がありました。嵐の日にここまで打ち上げられたのでしょうか。半分砂に埋もれた流木は、あの時からずっとここにあったように思えました。

この景色を見て安心感を覚えるのは、私は無意識のうちにもこの景色を思い出し、海岸の波や風の音を繰り返して聴いていたのかもしれない。

歩く度にできる足と靴の隙間に砂が入り、砂は足裏に回り土踏まずや、つま先で量を増していきました。容赦なく入り込む砂に、息苦しく追い立てられるような気持ちになりました。デイパックを砂浜に投げ出し、スニーカーと靴下を脱いで砂を払い、靴下を丸めてスニーカーの中に入れました。

裸足で歩き出すと、足の裏に感じる砂の熱さで毎日ここに通った夏の日が思い出されませんでした。あの時間聞いた風の音を耳に感じた気がしました。秋に向かう季節の中で力強さを失

くしたセミの鳴き声が風に揺れていました。
夏の日、海から入道雲が巨大な建物のように
に空に湧き立っていたことを覚えています。
だんだん耐えきれない熱さを感じ、海水で足
を冷やそうと走りました。波の音がそれを拒
むように迫って来て身体で受け止めます。白
茶色の砂が海水を含んで黒くなったところま
でたどり着きました。足裏に砂を固く、温度
が下がったことを感じ、走るのを止めまし
た。
足裏の感じる温度、砂の感触から海で泳ぎ
たいとせがんだ記憶が蘇りました。私を連れ
添って海に来た影は、母ではありませんでし
た。大きな影に引かれ、海の上を滑り浮き輪
の中で歓声をあげていました。
穏やかな海でした。砂浜に寄せた波が伸び
て薄いガラス板のように広がります。少し離
れた先で、ガラス板が鏡となって日差しを反
射していました。波打ち際を歩きました。足
の甲に波がかかり、足の裏から砂を奪ってい

きます。波が退く時に身体がさらわれそうになるのを繰り返します。足元の危うさが身体をめぐり、明るいのに森に迷い込んだ気がしました。誰もいない海で空と海が近づいて押しつぶされそうになる感じがしました。誰か思いだせない友達とこの浜の浅瀬に浮かんで空を見上げた時、空が迫って来て呼吸が苦しくなつたのを思い出しました。私は満たされたような気がしました。身体はこの危うさを求めていたのかもしれない。波打ち際を海水に足を浸らせながら歩きましました。松林が途切れたところから脱いだスニ―カ―の近くまで歩き、引き返して松林の始まる位置まで戻りました。何度往復した事でしょう。最初、浜辺を圧倒していた波の音が少し鎮まった気がしました。私は波に打たれ、波に洗われたように感じました。もう波の音は自分の鼓動の音のようになりなつた気がしました。デイパ

ツクを置いたところに戻り、ペットボトルの水を飲みました。口の端から一筋の水がこぼれ首を伝い胸を濡らし、砂浜に落ちて白茶色の砂を丸めました。靴下とスニーカーを履いて、松の木の傾きに誘われるように松林に入りました。林といっても木はまばらで、空と海から光が入る明るい場所でした。見上げると、微かな音を立って枝が揺れて、松の葉を光らせていました。た。海の上を進んできた風が林の中で交わり、音と色を持って流れていきます。風の揺れが枝から枝に会話をしているように伝わっていきます。倒れた木を処分したのでしょいか、ところどころに切り株がありました。その一つに座り周りを、そして頭上に視線を巡らしていません。人影が直ぐ近くにあって驚きました。影は老人のように見えませんでした。明るい林の中でわずかな陰に溶け込むように佇んでいました。

切り株に座り、両足の間に立てた杖に両手を
乗せていました。老人の視線は、松林の向こ
うの海を見ていました

++++

ここに足を踏み入れた時から私に気づいて
いたのでしょうか。心の中を見透かされてい
たような気がしました。切り株から腰を少し
上げて、こんにちはと小声で言いました。老
人は、ああと声を出して返事をしたような気
がしました。顔の向きは変えませんでした
。私に祖父はいませんでした。日に焼け
た横顔は、美術の教科書の絵か、何かの写真
集で見た顔に似ていたのか、どこか懐かしい
気がしました。老人の脇に砂浜と同じ色の犬が寝ていま
した。犬は頭を少しもたげ私をちらりと見て
姿勢を戻し、目を閉じました。良く訪ねるの

か、老人と犬はこの場所に馴染んでいました。老人の視線は少し方向が違うようです。が、あの時の母のように対岸の街を見ているようでもありません。――
「どちらから」
風に紛れるような声ではなく、はっきりそう聞こえました。
「東京です」
少し大きめの声で私は答えました。
「それは、それは」
会話はそこで途切れました。風で微かに揺れる松の枝が話の続きをしているようです。た。老人や犬は幻影で、ここに本当に居るのは私だけのよう。に思えてきました。老人や犬も、私がここに居ることを疑っていたかもしれません。沈黙が流れました。
「昔、私も住んでいた」
会話は途切れずに続いていました。どのくらい回想を巡らせていたのでしょうか。私の方に顔を向け、再び海の方に目を遣りました。

「最初は良かった。いや、最初からうまくいってなかった」

こちらに向けた顔は、意外に若く、老人と呼ぶほど年を重ねた顔ではありませんでした。男の人は私がない時でもこうやって誰かに話しかけているように、独り言を言っているような気がしました。疲れやあきらめや後悔が、顔や声色や身体全体に現れ、男の人を老人に見せているように思いました。

「何もいいことがなかった、東京では」

救いような言葉が続きそうで、私は口をはさみました。

「いつ、こちらにいらしたのですか？」

「もう、三年前になるかな。比木島に戻ったのは」

男の人とこの浜に流れている時間が、『もう』であって『まだ』でないのだと感じました。男の人は毎日こうしてここに佇んでいるのでしよう。

「波と風の音を聞きに来ているんだ」

男の人の言葉にどう応えるべきかためらい、私は、はあとという返事を風の音に紛らせました。一目を悪くしてね。この一年で急に「男の人は、私に話しかけているように言いました。私はええ、と風に答えを返しました。再び沈黙が続き、私は波打ち際の海水の動きを見ていました。少し波が大きくなったような気がしました。もともと男の人は、私の返事や答えを期待してないようにも思いました。少し離れると物がはつきりと見えない。手元のは目を近づければ見えるのだけけれど」

私は黙って頷きました。目の悪い男の人に
見えたかどうかは分かりませんが。先ほど、
波と風の音を聞きに来ているんだ、と男の人
は言いました。海を見ているような視線は、
音を探していたのかもしれないでした。
波打ち際から届く音を聞いていると、木が

一様に傾^{かし}いでいるのは、波の音を松林全体が受け止めているように感じました。そう思うと男の人の身体も松の木同様に、少し傾いでいるようにも見えました。

「影は分かるが顔の区別がつかない」

男の人は、東京でうまくいかなかった人生と視力を失ったことのどちらを嘆いているのでしょうか、たぶんそのどちらもなのでしよう。

輪郭しか見えない影の世界を想像してみました。恐らく視界全体が暗いように思いました。レースのカーテン越しに物を見るような色を失った影の世界、白く靄がかかったような世界なのでしようか。

「声で分かる。みんな知った声だから。顔も散々見てきた顔だから、見えているような気がする。知り合いと言ったって何人もいない」

男の人はそう言って海に向かって微笑みました。その笑みを見てほっとしました。この

島、近所の人、幼なじみが男の人の救いなのでしよう。

+++++

霧のかかった世界が、私にもあることに気づきました。時折思い出すそれらしい顔が浮かびます。目の位置、鼻の高さ、眉の濃さ、髪型はその度ごとに、どのように像を結んで良いのか收拾がつかなくなります。それは私が思いだす顔が、男の人の言う散々見てきた顔ではないからなのでしょう。顔の記憶は、小学校三年生の時に一旦途絶えました。そして、その一年後から夏ごとに遊園地で会って三回塗り重ねられました。最後が十五年前です。伏し目がちで無口なおじさんでした。私を見る時は、眩しい目つきをしていたことを覚えています。何がしたい、何が食べたいと尋ねる以外はしゃべりません。二人で行った遊園地は、別々に過ご

しているような時間でした。母に強制されたわけではありませんでした。私は義務として、出かけなければならぬように感じていました。楽しいはずの場所に、はしゃいではいけない気持ちを負って、時間が過ぎるのを待ちました。それも小学校卒業と同時に終わりました。いろいろな場面で、親の説明をする時に父という単語をためらわず口にできないようになっていったのは、その人と会うことがなくなっただけでした。友達と会う時、父の話を話す時に私も『父』という単語を使ってみたりしましたが、遊園地での退屈で辛い時間が思い出され、使うことはできませんでした。恐らく家族と一緒に暮らしていた時は父との楽しい出来事もあったのでしようが、父がおじさんや男の人となることを契機に記憶から消えたようでした。父と再び接点を持ったのは、私が大学に合格し入学した時でした。入学祝ぐらいもらっておいたらと、母から渡されたメモに父の住

所が書いてありました。そこに、手紙を送りました。素直に母の言葉に従ったのは、私もそうしたかったという気持ちがあったのかもしれません。また、今まで良いことが無かった私の人生にあの時、大学合格という初めて明るい出来事が舞い込んできて、有頂天になっ
ていたからかもしれない。メモの宛先に手紙を送りました。

『お元気ですか？　〇〇大学に合格し、四月から通います』

余白の中で小さな文字が揺れていました。書きたいことはたくさんあったような気がしました。この手紙が向かって行く住所は知りませんが、受け取る人の顔をあまりはつきり覚えていないことに気づくと、それ以上の文字を書くことはできませんでした。余白いっぱい郵便に白紙の便せんを重ねて送りました。しばらくして入学祝の五万円の商品券が送られてきました。

『大学合格おめでとう』

余白たっぷりの手紙が添えられていました。届いた時、私は少し後悔しました。忘れてしまえたものを取返してつなぎ止めてしまつたと感じたからです。大学を卒業し、就職した時は父には連絡しませんでした。

+++++

若い女性と暮らすために家を出て行ったと、母は小学校三年生の私に静かに説明しました。今から思うと、母が『若い女性』と云わずに普段家ではあまり使わない『女性』という言葉を使ったことを、私は新鮮に受け止めました。私の前で母は必死に心の平衡を保つていたのかもしれないし、私に話した時は既に心の整理がついて落ち着いていたのかも知れません。島を離れてから二年目の夏でした。いつも何かが起こるのは夏のような気がしていません。少し前から、父が家にいないことが多く

なりました。父がたまに帰って来た時、両親が夜遅くまで声を荒げて話し合っているのを私は知っていました。暗い部屋で布団を頭までかぶり、鼻歌を口ずさんで隣の部屋から聞こえる声や音を耳から追いだしました。家を出ていった父が二年後の夏から遊園地に連れて行ってくれるようになり、それが小学校の間三回続きました。その後父とは断絶していたのですが、大学生になってから、年に一度便りが届くようになったのです。起点は私が送ったことを悔やんだ合格報告に対する、入学祝を受け取ってからです。便りは絵はがきで写真の裏面の上段に宛先と住所を、下段に『お元気ですか？』と癖のある右上がりの、角ばった文字が書かれています。た。余白をたっぷり残し、何を書こうかとためらいのある筆跡にも見えました。しかし、『お元気ですか？』以外に文字は書かれていませんでした。それは遊園地での会話を思い

出させました。
はがきが初めて届いた夏は直ちに捨てるこ
とはありませんでした。以降は写真を見て
届いたその日に捨てていました。私と母を捨
てた父親がどこで何をしていようと興味は
ありませんでした。毎年変わる絵はがきの写
真はどこかを転々としているようでしたがそ
れを知らせてくる神経が鬱陶うっとうしかったので
す。お元気ですか、の問いかけも私を苛立た
せました。母が何も言わず淡々と生活してい
る分、私とその役を買って出なければという
心の動きがあったのかもしれない。
手紙を書いて私の住所を知らせ、五万円の
商品券を受け取った自分を恨みました。郵便
受けに毎年当たり前のように届く絵はがきを
手に取り、苦い感情が湧き上がってきまし
た。父からの便りは一向に好転しない自分の
運命を夏が巡ってくる度に思い出させるよう
に思えました。
絵はがきは三年前から、市販のものから手

作りの写真はがきに変わりました。写真の場
所がどこかはすぐに分かりました。去年か
ら、はがきは引き出しに取ってあります。私
に心を許す人ができたことがきっかけでし
た。
「夏に届く、斜めに傾いた大きな字で書かれ
たはがきを見ると気分が滅入り、読まずに届
いた日に捨てていきます。もっとも、書いてあ
るのは『お元気ですか』、の一文なので、目
に入ってしまったのですけれど」
そう言うと彼は私を見て言いました。
「お父さんは、何かを伝えたかったのかも知
れないね」
「でも、母と私を捨てた父に用はありませ
ん」
彼はふっと息を吐いて私を見て微笑みまし
た。
「それはそうかも。でも、はがきは捨てずに
とっておいたら」
何か良いことが起こらないのは、はがきの

せいではないことが分かりました。私は彼に
出会えたからです。夏に届くはがきのことを
話せたのは彼が最初の人でした。彼は私の頑かたく
々な部分に寄り添ってくれました。包み込む
ような視線で見守ってくれました。私は自然
と、背負っている包を解くことになりましたし
た。
私には父を探す自分と避けようとする自分
と二人いました。その二人が緊張関係にあっ
たように思います。心のどこかで。彼と出合
い知っていくうちに、その緊張は解れていき
ました。
「お父さんをこれ以上、敢えて避ける必要は
無いよ。もう十分離れているのだから。時間
も距離も」
私は、父を避ける気持ちを緩めました。そ
うしたら心が軽くなった気がしました。引き
出しに取っておいた去年届いたはがきを手に
しても、以前感じた苦みや気が滅入る感情は
湧いてきませんでした。そうやって彼は、私

の中にあるしこりを解ほぐしてくれました。
去年、父からの絵はがきを引き出しにしま
って、おこうと決めてから、一年後に私たちは
婚約しました。そして、来年の一月に結婚式
を挙げることにしました。引き出しには、先
日届いたはがきも加わりました。はがきの写
真は同じ島を去年とは別の角度から撮影され
た景色でした。

+++++

彼と二人で婚約と結婚式のことを母に報告
した帰りの電車で、私たちは並んで吊革につ
かまり、車窓から見える景色を眺めていまし
た。いろいろな形のビルの壁面が強い日差し
を反射して眩しく、都会の夏を感じていまし
た。私が何か思っていることを察して彼が窓
の景色に目を遣りながら言いました。
「結婚のこと、お父さんに知らせてあげた
ら。式に出席してもらっても良いんじゃないな

い。君が望むなら」

三年前から届いたはがきの写真から、父が生まれ故郷の比木島に居ることは分かっていた。私たちが未だ家族だったころ暮らした島でもあります。引き出しにあるはがきを見れば、住所も分かるはずでした。私は視線を車窓に向けたままゆっくり頷きました。私も結婚のことを父に知らせようかと思いました。したが、式への招待までは考えてはいませんでした。

「でも、母さんに訊いてみないと」

「それはそうだね」

自宅に戻って、一時間前に会って話した母に電話で尋ねました。

「どう思う？」

「いいわね。知らせてみたら。式に出なくてもお祝いぐらい届くかも」

携帯を耳から遠ざけるほどの声で、母は笑いしました。大学合格を知らせたら、と言った時と同じ口調でした。あの時以来、私は苦し

んできたのにと思いました。彼に報告すると、愉快そうに笑いました。

「君が大学に合格した時には、お母さんの中でお父さんとの関係はきれいに解消できていたんだろうね。いや、もっと以前、お父さんが家を出ていった時、整理できていたのかも
しれない。お母さんがそう言ってくれるなら、自分の心に従えばいい」

その晩、私は父に手紙を書きました。

『来年一月二十五日、縁あって土田歩さんと結婚式を挙げます。結婚式に出席してください』

『良かったら結婚式に出席してください』と、『良かったら』を付けるか迷いました。

書いた便せんを何度も丸めて捨てました。

結局、私も大学合格を父に知らせた時のように、短い文章を書き余白いっぱい**の便せん**に、白紙の便せんを重ねて送りました。

手紙を出したのは、今年、父からの写真は
がきが届いた一週間後でした。父はあるはず

のない返事が、突然届いてさぞや驚いたでしよう。私は、一日また一日と父からの返信を待つうちに、父がはがきを投函した後の気持ちを考えていました。大学合格で商品券が届いた時のお礼の手紙は書きましたが、以来十年近く続く、父の夏の便りを私は無視し続けてきました。父はこれまで送ってきたはがきの返事を、待っていたでしょう。恐らく私からの返信を期待などしていません。十年も続ける無駄な行為に、父は何故終止符を打たなかったのでしょうか。生まれ故郷であり、家族が幸せだった記憶が痕跡のように残る比木島の住所に宛てた手紙が、戻ってこないことから、結婚の知らせが届いているはずでした。私は一日、また一日と父から届くはずの手紙の返事に注意を向けられていきました。式に出席するつもりなら、時間と場所の情報は必要ですし、欠席で

あるならばそれは伝えられるべきでしょう。
マンション一階の郵便受けの前で、周りに
誰もいないことを確認して扉を開けていまし
た。表情が顔に出るのを見られたくなかった
からです。ただの確認の作業なのに鼓動が速
くなり、郵便受けに届いた手紙が保険会社や
通販のダイレクトメールだけだったことを確
認するとがっかりしました。
その日も便りは届いていませんでした。私
より早く帰っていた歩さんは、玄関のドアを
開けた私を見てくすつと笑いました。
「島に行つて来たなら」
私の心を見透かしたように言いました。返
信を待っていたことは事実でした。気になり
だしたらそれが少しずつ大きくなっていくの
が分かりました。自分に確認作業だと言ひ聞
かせながら、私は返信を待っていました。
島を訪ねることを黙っているのは良くない
と母に伝えました。
「私に訊かなくても、自分で好きなようにす

ればいいのよ。あなたは、もう大人なんだから。結婚するんでしょー」
弾けそうな笑いを残して電話を切りました。母は私が島を訪ねることは全く関心がない様子でした。声の調子から私に対して少し呆れているようにも感じました。
母から反対されなかったことで、私は島に行く決心がつかしました。それは父に会いに行くというより、返事が来ない理由を探しに行くと言ったほうが合っている気がしました。

+++++

どれくらい時間が経ったでしょう。男の人は同じ佇まいで切り株に腰かけていました。た。砂色の犬も男の人の隣で平たく寝転がっていました。
そろそろ、この場所を離れ高台の家を目指さなければと思いました。少し日が傾き波と風の音が大きくなかった気がしたからです。帰

りの連絡船の時間も気になりました。私は切り株から腰をあげ立ち上がろうとしました。「この島は、いい思いしかない」

「そうでしたか……」

声に驚いて思わず合いの手を入れた私は浮かせた腰を切り株に戻しました。男の人は波と風の音を聞きに来ているというより、思い出にひたりに来ているのかもしれないと思いました。

「ああやって子供の遊ぶ姿が目に見えるようだ」

太陽の光が反射し、海原が銀色の鏡のよう

に広がっていました。いつの間にか四、五人の子供たちが現れ、光る海を背景に黒い影が砂浜を駆けていました。

終わりがけたはずの、とぎれとぎれの話に、またしばらく付き合わなければならぬのかと思いましたが。

「子供がいてね。この砂浜でよく遊ばせた。この浜はあの時のまま。何も変わっていないな」

い

何も変わっていないという浜の様子を視力の衰えた目で確認できたのでしょうか。子供を遊ばせたというのは、帰省で島に戻った時に、この海岸で子供を遊ばせたことを言っているのでしょうか。男の人の発する言葉に、反応しなくて良いことを理解しながら、つい考えを巡らせてしまう私に呆れていました。男の人は波の音や、風の音から子供たちの歓声を掬^{すく}いだして耳を傾けているようでした。松の小枝が風に揺れ音を立てる中、海原の光の反射が松林まで届いて、男の人の顔を明るく反射しました。顎の先端に小さなほくろが見えました。その小さな黒い点に引きつけられました。黒い点は、私の視覚の奥深くを探っていききました。

「お子さんは、今どちらですか」

男の人のほくろから視線を外さずに尋ねました。

「東京に暮らしている。ずいぶんと会ってい

ない。離婚してね。昔に」

男の人はつながらない文章をとぎれとぎれに声に出しました。

「お子さんは」

「女の子」

私の不十分な問いに対して、男の人は理解して答えました。

松林に足を踏み入れて男の人と交わした会話を、最初から思い起こしていました。男の人は、三年前この島に戻ってきたと言いました。男の人は、男の人は前にも比木島に暮らして居たということで、この島出身者であっておかしくありません。三年という数字は重なります。かつて東京に住んでいた。女の子の父親であるとも言っていました。

顎の先端のほくろを間近で見た記憶が蘇ってきてきました。鼓動が高鳴りました。それは、腕に抱かれた時、目の前にあった黒い点でした。背中を冷たい汗を感じ、身体から力が抜けていきました。

顎の先端のほくろは、私と男の人を結ぶ揺るぎのない確証でした。男の人を観察しました。男の人の風貌や声が自分の記憶のどこかにあるか探しました。大きな波が打ち寄せたように、私の中に残っている記憶の断片が整然とつながりました。

男の人は、恰幅の良い体軀から痩せて小さくなっていました。つやのある顔が乾燥した皺を刻んだ顔に、張りのある声がしわがれた声に変わっていました。

「そうでしたか」

そう返す以外適当な言葉が見つかりませんでした。私に届いたはがきの大きな文字は目が良く見えないことが理由だったかもしれませんが、私を送った手紙の文字は、読めたのでしようか。不安になりました。返事の来ない理由はそこにあつたかもしれませぬ。どう尋ねたら良いか考え始めました。

男の人は、杖に置いた右手を左手で揉みながら、口の出す言葉を探しているようでした。

た。

「結婚するらしい。結婚式に出てくれと手紙が届いた」

男の人は、頬を緩めました。手紙は届き、読んでいたのでした。

「おめでとうございます。物が見えにくいと言われていたので」

「目を近づけたり、拡大鏡を使えば問題なく見たり、書いたりできるんだ」

「そうですか」
男の人は杖に載せた手を再び揉みながら言葉を選んでいるようでした。

「だけれどこの目では行かない。式場まで移動できないだろう」

確かに男の人が電車や地下鉄を乗り継いで

結婚式場まで移動するのは困難のように思えました。

「東京に住んでいる私たちでも、移動に苦労することがありますから」

男の人は頷きました。

「あんな人の多いところで、良く暮らしている
と感心しているんだ。大学を出てちゃんと
就職し、そして今度は結婚だ。父親として何
一つしてこなかったが、元の奥さんが立派に
育ててくれた」

「私も母子家庭で育ちました。一人で子供を
育て大変だったと思いますが、母は一言も愚
痴をこぼしませんでした。会社員として働
き、家事をして、時には父親代わりもしてく
れました」

男の人は、深く何度も頷きました。
「お母さん、大変だったでしょう。あなたも
苦労されたね。言葉を聞いていると、立派に
成長されたことが分かります」

男の人はこの歳で目が不自由になり、弱気
になってそう思うようになったのでしよう
か。

「娘さんに最後に会われたのはいつですか」
高台の家を訪ねる必要は無くなりました。
この場で少し詳しく話を聞いてみることにし

ました。この男の人と話す最後の機会になる
かも知れないと思いつながら。
「十五年も前になるかな。離婚したのは二十
年近く前だが。小学校の間は、一年に一度は
会っていたから。元の奥さんが、年に一度娘
の成長を手紙で教えてくれた。スポーツや勉
強にずいぶんと頑張っていたみたいだった」
母親から男の人に連絡が入っていたと聞き
愕然としました。母親の落ち着きの裏にはこ
んな事情があったのでした。
「生きていることを知らせるために娘に連絡
を入れるようにと言われて、何と書いていい
やら分からないので、夏に絵はがきを送るよ
うにしたんだ。営業職で地方と東京勤務を繰
り返していた」
夏に届くはがきを受け取った時の感情が蘇
ってきた。しかし、はがきが届くのは母
の差し金だったと知りました。母に向かう怒
りのような感情をどう鎮めていいか分からな
くなりしました。

「話してくれたら良かったのに」

眩くように言葉が出て、林を抜ける風に運ばれました。

「何だったのよ」

続いて言葉が出ました。

もう、家に帰ったのでしょいか、砂浜で遊んでいた子供たちの影は消えていました。男の人は、私が発した言葉には無反応で、独り言と受け流したようです。

男の人は杖に載せている手をすり合わせて何かを考えているようでした。

「娘さんには出席できないと伝えられたのですか」

男の人が顔を私に向けました。顎の先端のほくろが小さくはつきりと見えました。疲れた表情に見えました。長くこの場所に居すぎた、そう思っているようにも見えました。

「返事を書けないでいるんだ」

一つ大きく息を吐きました。しばらく杖で地面をトントンと叩きながら考えをまとめて

いるようでした。
「視力が落ちていることは言いたくない。何
一つしてこなかった私に、声をかけてくれた
んだが」
波の音を何回か聞いて答えました。
「おめでとうって返事を書けばいいのではな
いですか？ 招待ありがとう。ありがたいけ
ど、出席できないと。伝わりますよ。きつ
と。娘さんなら分かると思います」
男の人はさらに傾いた日の光で、色を変え
た海を眺めていました。軽く何回か頷いたよ
うに見えました。
サイレンの音が遠くから聞こえました。懐
かしい音でした。耳が覚えていました。比木
島の午後四時を知らせる合図でした。この浜
で遊んでいてこの音をよく聞きました。波う
ち際を裸足で駆け、貝殻を集めたり、ビーチ
グラスを拾ったりして、乾いた砂の上に並べ
てどれがきれいか競い合いました。いつも一
緒に遊んでいたのは、いくみちゃんでした。

笑うと口元にえくぼが寄るおかつぱ頭の小柄の子でした。子供たちの影が消えた砂浜で、私といくみちゃんか歓声をあげて駆けている姿が見えました。

男の人は、私の言葉に反応せず、波と風の音に耳を傾けているようでした。

「私、以前この島を訪ねたことがあったので。ずいぶん前のことです。島の景色が美しく、温かい思いが湧いてくるのです。今、この島を訪ねて気づきました。海が青く、丘があり緑があつて、記憶の中にあつた島よりずっと鮮やかできれいでした。訪ねて本当に良かったと思ひました。温かい思いが湧いてくると思つたのは、この浜から見た景色を覚えていてそう思つたのかもしれない。ん」

「た。眞実を散りばめて私は男の人に伝えました。本当にその通りです。ここに居ると心が洗

われる。このきれいな島で育ったことを忘れてはいけなかった」

私の方を向いて言いましたが、言葉は自分の心に向かっているようでした。

「まずは、おめでとうと返事を返さないといかな」

男の人は私の言葉をちゃんと捉えていました。

「ええ、ぜひそうして下さい。娘さんは喜ぶと思います」

自然、大きな声で言いました。男の人はゆっくり立ち上がりました。砂色の犬もすつくと起き上がりました。私もそれにつられるように切り株から腰を上げました。

「足元に気を付けてお帰り下さい」

「ああ、あなたも」

男の人と目が合い、私の顔をしっかりと見ただようでしたが、視界にあったのは輪郭だけだったでしょうか。私は男の人の顔をしっかりと見つめました。日に焼けた顔のこめかみや頬

に染みが目立っていました。目尻の皺も深く刻まれていました。少し丸まった背中を進む後ろ姿は、幼い時の記憶の影の父よりずいぶんと細く小さな気がしました。一歩一歩確かめるように杖を突きながら歩いて行きました。犬は、男ののきなながら歩いて行きました。犬は、男のの先を速すぎず遅すぎず歩いていきます。二つの影は松林を抜けて、アスファルトの道路を進んでいきました。私はゆっくりと二つの影を追い、松林を抜け道路に出ました。二つの影が、左手の丘の上にくっきりと消えるまで見ていました。松林に戻りもう一度切り株に座りました。影が濃くなった林の一面の切り株を見ました。男の人が佇んでいた場所です。まだ、そこに男の人の気配を感じられるような気がしました。浜辺の景色を見ました。傾いた日が赤みを帯びた光を放ち、海を照らしていました。漁船でしようか、沖を進む小舟がエンジン音を

立てて紅に光る海に波の筋を伸ばしていました。
た。

(了)